

星城大学大学院健康支援学研究科 研究成果報告書（論文掲載版）

報告日	2017年9月12日
氏名	窪 優太
指導教員名	竹田 徳則
掲載内容	<input checked="" type="checkbox"/> 研究論文採択 <input type="checkbox"/> 総説論文掲載 <input type="checkbox"/> その他紀要など
論文採択・掲載日	平成29年8月20日
論文掲載雑誌名	老年精神医学雑誌 28 (8) : 899-904, 2017.
巻・号・年	
doi	
タイトル	回復期リハビリテーション病棟入院の抑うつ・アパシーを呈する認知症高齢者に対する集団料理活動.
発表者名 (全員記載)	窪優太, 中澤遼一, 各務真菜, 加藤美樹, 中島大貴, 岡村英俊, 長谷川慧, 竹田徳則.
要旨 (250字程度)	認知症高齢者の抑うつ・アパシー改善に対する集団料理活動の効果を調査した。対象は回復期リハビリテーション病棟入院中の認知症高齢者とし、介入群14名、対照群13名に割付けた。介入群には1回40～50分、週2回計8回、5名程度での集団料理活動を実施した。その結果、介入群には介入期間中、抑うつの有意な改善が認められたが、持続効果は認められなかった。一方、アパシー、QOLには有意な改善は認められなかった。本研究の結果より、料理活動によって活動期間中、認知症の抑うつが改善することが確認された。

星城大学大学院健康支援学研究科 研究成果報告書（論文掲載版）

報告日	2018年1月10日
氏名	伊井公一
指導教員名	山田和政
掲載内容	<input checked="" type="checkbox"/> 研究論文採択 <input type="checkbox"/> 総説論文掲載 <input type="checkbox"/> その他紀要など ※いずれかにチェック
論文採択・掲載日	2017年6月28日
論文掲載雑誌名	理学療法科学, 32(6), 763-767, 2017.
巻・号・年	※印刷中の場合は雑誌名のみ記載
doi	https://doi.org/10.1589/rika.32.763
タイトル	転倒低リスク高齢者における転倒要因と転倒予防に向けた一考察
発表者名（全員記載）	伊井公一, 山中健行, 鈴木一弘, 廣瀬健人, 神野佑輔, 山田和政 ※筆頭著者は一番前に記入し, 自分に下線
要旨 (250字程度)	<p>〔目的〕 TUG テストにて転倒リスクが低いと判断される高齢者の転倒要因を明らかにし, 転倒予防について検討した. 〔対象と方法〕 TUG テストが 13.5 秒以内の高齢女性 29 人を, 非転倒群と転倒群に分類した. 歩行課題と起立一歩行課題における定常歩行に至る歩数, 起立一歩行課題における起立動作時の前方重心移動速度, 身体運動機能, 転倒恐怖心を調査し, 2 群間で比較した. 〔結果〕 非転倒群 (19 人) と比較して転倒群 (10 人) は, 起立一歩行課題で定常歩行に至る歩数が 1 歩多く, 前方重心移動速度は有意に遅く, また転倒恐怖心のみ有意に低かった. 〔結語〕 転倒経験のある転倒低リスク高齢者の転倒要因は転倒恐怖心であり, 転倒予防として動作方法の工夫もそのひとつの手段であると考えられた.</p>

星城大学大学院健康支援学研究科 研究成果報告書（論文掲載版）

報告日	2017年8月27日				
氏名	石橋雄介		指導教員名	山田和政	
掲載内容	<input checked="" type="checkbox"/> 研究論文採択 <input type="checkbox"/> 総説論文掲載 <input type="checkbox"/> その他紀要など <small>※いずれかにチェック</small>				
論文採択・掲載日	2017	年	3	月	23
					日
論文掲載雑誌名	理学療法科学, 32 (4), 509-513, 2017.				
巻・号・年	<small>※印刷中の場合は雑誌名のみ記載</small>				
doi	https://doi.org/10.1589/rika.32.509				
タイトル	精神科病棟入院患者の現状と理学療法の効果				
発表者名（全員記載）	石橋雄介, 西田宋幹, 山田和政				
	<small>※筆頭著者は一番前に記入し, 自分に下線</small>				
要旨 (250字程度)	<p>〔目的〕身体合併症を呈した精神科病棟入院患者を対象に, 生活機能と精神機能に対する理学療法 (PT) の有効性を検証した. 〔対象と方法〕身体合併症に対して PT を実施した精神科病棟入院患者を対象に, 理学療法開始時と終了時の Barthel Index スコアおよび Global Assessment of Functioning スコアをカルテより収集した. 〔結果〕両スコアとも PT 終了時で有意に高得点であった. 〔結語〕身体合併症を呈した精神科入院患者に対する PT は, 生活機能のみならず精神機能の改善も期待できることが示唆された.</p>				

星城大学大学院健康支援学研究所 研究成果報告書（論文掲載版）

報告日	2017年8月21日
氏名	窪 優太
指導教員名	竹田 徳則
掲載内容（ <input type="checkbox"/> 研究論文採択 <input checked="" type="checkbox"/> 総説論文掲載 <input type="checkbox"/> その他紀要など）	※いずれかにチェック
論文掲載日：	2017 年 7 月 20 日
論文掲載雑誌名 巻・号・年	日本認知症ケア学会誌 16(2) : 484~497, 2017.
doi	
タイトル：	本邦における認知症のBPSDに対する非薬物療法の現状と課題
発表者名（全員記載）：	窪優太, 竹田徳則
要旨 (250字程度)	国内で実施された認知症の行動・心理症状（BPSD）に対する非薬物療法の効果について、2000年から2015年の期間に国内外の学術誌に掲載された原著論文を抽出してレビューした。その結果、分析対象文献は15件で、BPSDの改善報告は10件であった。そのうち具体的症状として、抑うつと妄想観念の改善報告が3件と2件が多かった。BPSDの改善は週1回30分以上の介入で効果が期待できる可能性が高かった。今後の課題として、BPSDの各症状に対してどのような介入方法が最も効果的であるのかを明らかにする必要性が示唆された。

星城大学大学院健康支援学研究科 研究成果報告書（論文掲載版）

報告日	2017年4月27日				
氏名	伊井公一		指導教員名	山田和政	
掲載内容	<input checked="" type="checkbox"/> 研究論文採択 <input type="checkbox"/> 総説論文掲載 <input type="checkbox"/> その他紀要など <small>※いずれかにチェック</small>				
論文採択・掲載日	2016	年	11	月	9日
論文掲載雑誌名	理学療法科学, 32 (2), 221-225, 2017.				
巻・号・年	<small>※印刷中の場合は雑誌名のみ記載</small>				
doi	https://doi.org/10.1589/rika.32.221				
タイトル	起立－歩行課題における若年者と高齢者の比較				
発表者名（全員記載）	伊井公一, 山中健行, 鈴木一弘, 神野祐輔, 山田和政				
	<small>※筆頭著者は一番前に記入し, 自分に下線</small>				
要旨 (250字程度)	<p>〔目的〕歩行課題と起立－歩行課題を行い, 定常歩行に至る歩数を高齢者と若年者と比較し, 過渡歩行時の特徴を調査した. 〔対象と方法〕女性高齢者19名, 健常若年女性10名とした. 両課題の最速歩行時の歩幅, 速度, 起立－歩行課題での前方重心移動速度, 運動機能評価を比較した. 〔結果〕歩行課題では差がなかったが, 起立－歩行課題では定常歩行に至る歩数は高齢者で1歩多かった. 起立－歩行課題での前方重心移動速度, 運動機能評価で高齢者が有意に低下していた. 〔結語〕起立－歩行課題で定常歩行に至る歩数に違いがみられた. 要因として前方移動速度の低下が影響し, その原因として加齢による運動機能の低下が影響を及ぼした可能性があると考え.</p>				

星城大学大学院健康支援学研究科 研究成果報告書（学会発表・講演講師版）

報告日	2017年3月18日												
氏名	篠田光俊	指導教員名	安倍基幸先生										
掲載内容	<input checked="" type="checkbox"/> 学会研究発表 <input type="checkbox"/> 講演講師 <input type="checkbox"/> その他 ※いずれかにチェック												
学会等開催日	29	年	3	月	16	日	～	29	年	3	月	20	日
学会等名称	日本脳卒中学会												
学会等開催場所	日本，大阪府，大阪国際会議場												
	国名，都市名，会場名												
研究・講演タイトル	脳卒中片麻痺患者の正中神経に対するエコー評価												
発表者名（全員記載）	篠田光俊，安倍基幸												
研究概要 （150字程度）	<p>慢性期脳卒中片麻痺患者での正中神経の形態学的な特徴を，エコーを用いて明らかにしました。</p> <p>対象を，健常，麻痺側，非麻痺側の3群に分けて検討しました．調査項目は，理学所見による正中神経障害の有無，エコー評価による正中神経の断面積と手関節運動に伴う長軸移動距離としました．非麻痺側は，経過と共に断面積が大きくなり，その増大により長軸移動距離の短縮を認めました。</p>												
感想その他 アピール欄 （100字程度）	<p>エコーは，臨床現場で用いられるようになってきています．本発表では，予防的観点から脳卒中患者の正中神経に対するエコー評価の重要性が提唱されおり，臨床的な意義の高い報告であると思います。</p>												
写真添付欄 2枚以内													

星城大学大学院健康支援学研究科 研究成果報告書（学会発表・講演講師版）

報告日	2017年3月3日
氏名	則竹賢人
指導教員名	山田和政
掲載内容（ <input checked="" type="checkbox"/> 学会研究発表 <input type="checkbox"/> 講演講師 <input type="checkbox"/> その他）	※いずれかにチェック
学会等開催日：	2017年2月23日～2017年2月24日
学会等名称：	第32回日本静脈経腸栄養学会学術集会
学会等開催場所：	岡山県，岡山シンフォニーホール
国名，都市名，会場名	
研究・講演タイトル：	在宅脳卒中者の体組成と身体活動量からみたフレイル予防に向けた指導内容の検討
発表者名（全員記載）：	則竹賢人，山田和政 ※発表者は一番前に記入し，自分に下線
研究概要 （150字程度）	身体活動量とともに筋肉量もフレイルティ・サイクルの項目であり，在宅脳卒中者がフレイルに陥らないための指導が重要である．本研究は退院後の在宅脳卒中者3名の体組成と身体活動量の変化を明らかにし，適切な指導内容について検討した．
感想その他 アピール欄 （100字程度）	今後の研究を進めていくに当たり，参考となる情報を収集することができ，発表では質問の他，複数のアドバイスや意見を頂くことができた．
写真添付欄 2枚以内	